

# 第22期考古学セミナー（2020年度）

－水木田遺跡と縄文時代中期前半の山形－

## 第1回講座

講義①

重要文化財 水木田遺跡出土品について

山形考古学会副会長

阿部 明彦 氏

令和2年9月27日（日）

会場 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

# 水木田遺跡と 縄文中期前半のやまがた

## 縄文中期への胎動と展開

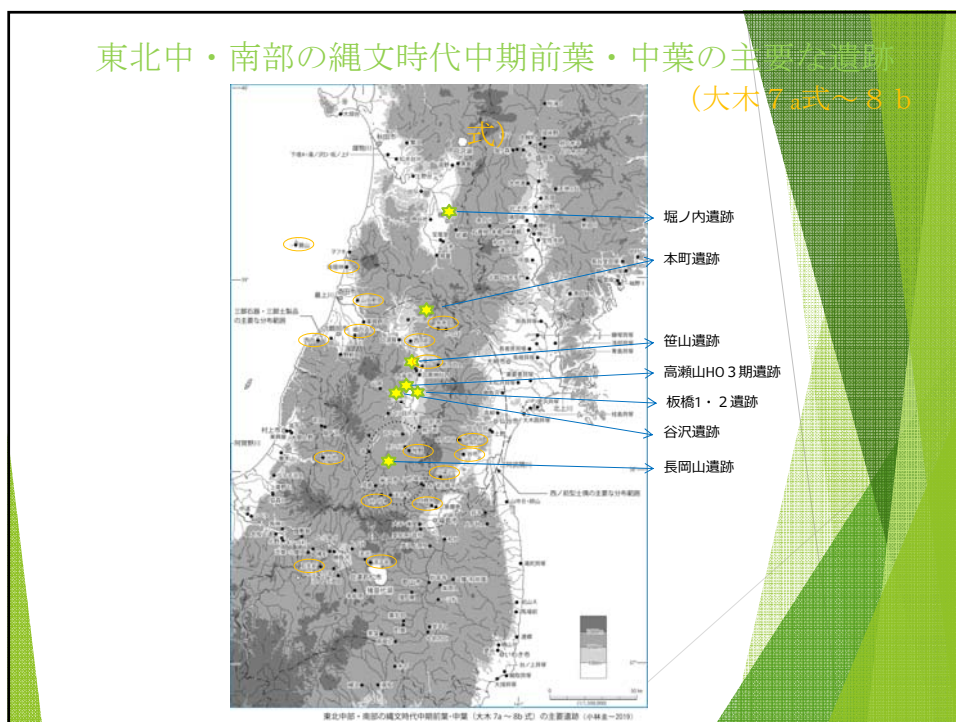
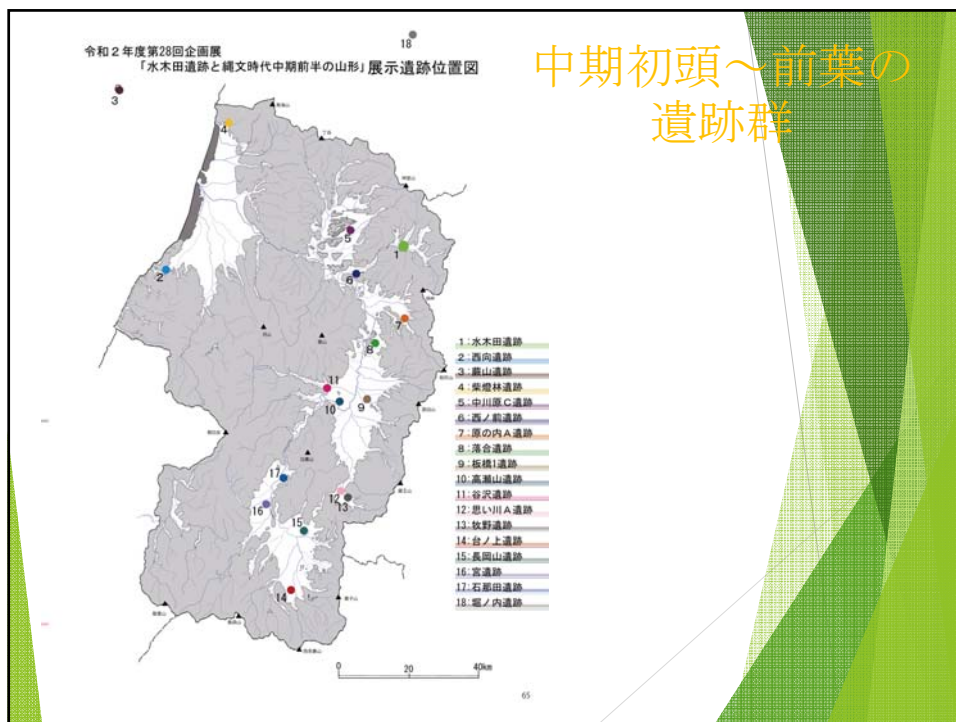


20200927

阿部明彦

## 縄文中期のやまがた

- ▶ 1 縄文前期～中期へ
  - ▶ 集落の盛衰と土器文化の変遷
- ▶ 2 土器はどのように変わったか
  - ▶ 前期末から続く中期初頭の遺跡と土器型式の関係
- ▶ 3 水木田遺跡に見る中期前葉の発展
- ▶ 4 西ノ前型土偶の出現と縄文女神の秘密
  - ▶ 立つ土偶 歩く土偶 土偶の分布
- ▶ 5 謎の石棒文化
  - ▶ 大型石棒の出現と石棒祭祀
  - ▶ 鼓形頭部を持つ石棒の分布と西ノ前型土偶の分布
- ▶ 6 超大型深鉢形土器の謎
- ▶ 7 水木田遺跡・出土品が語るもの



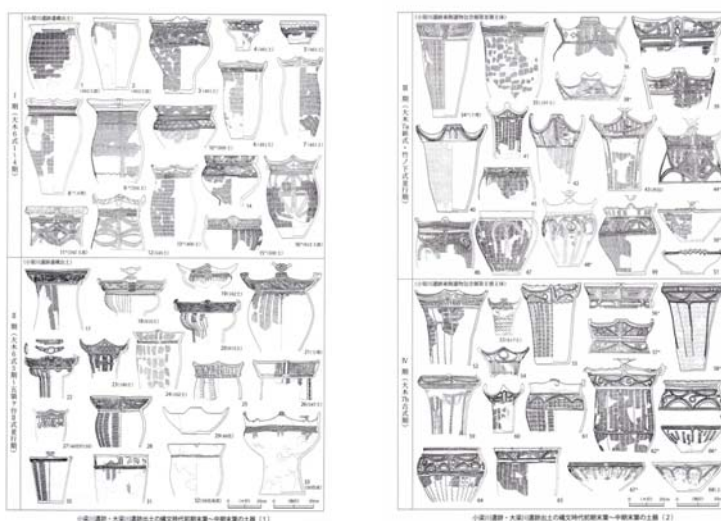
## 縄文中期の始まり 前期末～中期初頭の土器編年表

表1 今村啓爾氏による前期末～中期初頭の編年（今村 2006・10）改変

	北 陸	中部高地	西 関 東	東 関 東	東北中・南部	東北北部
前	靦ヶ森Ⅱ	諸磯c(古)式	諸磯c(古)式	興津Ⅱ式	大木5a式	
	靦ヶ森Ⅱ	諸磯c(新)式	諸磯c(新)式	粟島台式	大木5b式	
	鍋屋町式 第1段階	十三善提式 古段階前半	十三善提式 古段階前半	粟島台式	大木6式1期 (古段階)	円筒下層c式
期	鍋屋町式 第2段階	十三善提式 古段階後半	十三善提式 古段階後半	粟島台式	大木6式2期 (古・中段階の間)	円筒下層c式?
	真脇式	十三善提式 中段階	十三善提式 中段階	下小野式	大木6式3期 (中段階)	円筒下層d1式
末	朝日下層式	松原式	十三善提式 新段階前半	下小野式	大木6式4期 (新段階)	円筒下層d1式
	新保式 上安原段階	踵場式	十三善提式 新段階後半	下小野式	大木6式5期 (新段階)	円筒下層d2式
	新保式 第Ⅱ段階	踵場式	五領ヶ台Ⅰa式	五領ヶ台Ⅰa式 (+下小野式)	五領ヶ台Ⅰ並行 (大木7a-Ⅰ)	円筒上層a1式
中	新保式 第Ⅱ段階	踵場式	五領ヶ台Ⅰb式	五領ヶ台Ⅰb式 (+下小野式)	五領ヶ台Ⅰ並行 (大木7a-Ⅰ)	円筒上層a1式
	新保式	踵場式	五領ヶ台Ⅱa式	五領ヶ台Ⅱa式 (+下小野式)	五領ヶ台Ⅱ並行 (大木7a-Ⅱ)	
初	新保式	五領ヶ台Ⅱb式	五領ヶ台Ⅱb式	五領ヶ台Ⅱb式 (+下小野式)	五領ヶ台Ⅱ並行 (大木7a-Ⅱ)	
	新保式	五領ヶ台Ⅱc式	五領ヶ台Ⅱc式	五領ヶ台Ⅱc式 (+下小野式)	五領ヶ台Ⅱ並行 (大木7a-Ⅱ)	
頭	新崎式	大石式	竹ノ下 大石式	竹ノ下式	本来の大木7a式 (大木7a-Ⅲ)	

小林圭一 (2016)

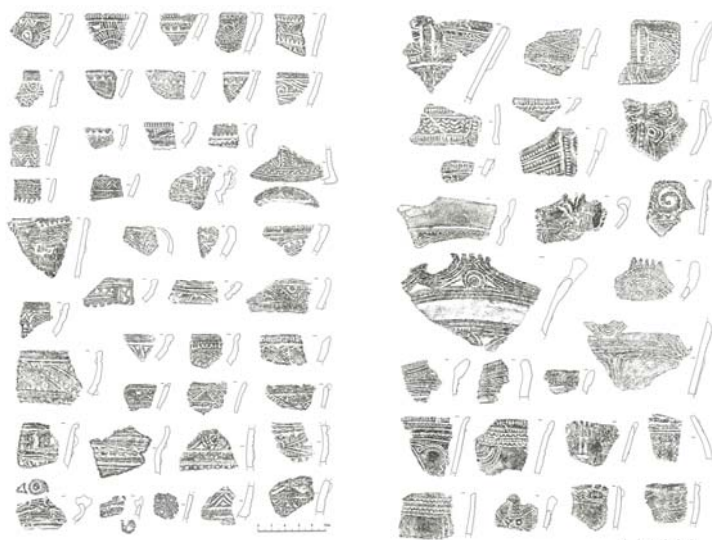
## 前期末～中期初頭の編年図 大木6式～大木7a式への変遷



小林圭一 (2017)

### 中期初頭の遺跡群

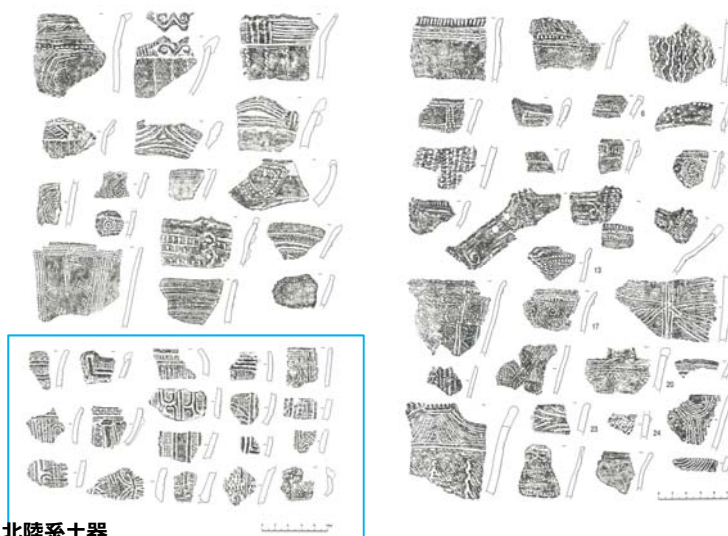
#### 台ノ上遺跡 (1)



五領ヶ台 I - II 式系土器

### 中期初頭の遺跡群

#### 台ノ上遺跡 (2)



北陸系土器

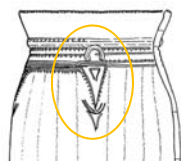
五領ヶ台 II 式系土器

### 中期初頭の遺跡群 台ノ上遺跡 (3)



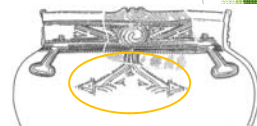
五領ヶ台系竹ノ下式・下小野式系土器

### 中期初頭の遺跡群 長岡山遺跡



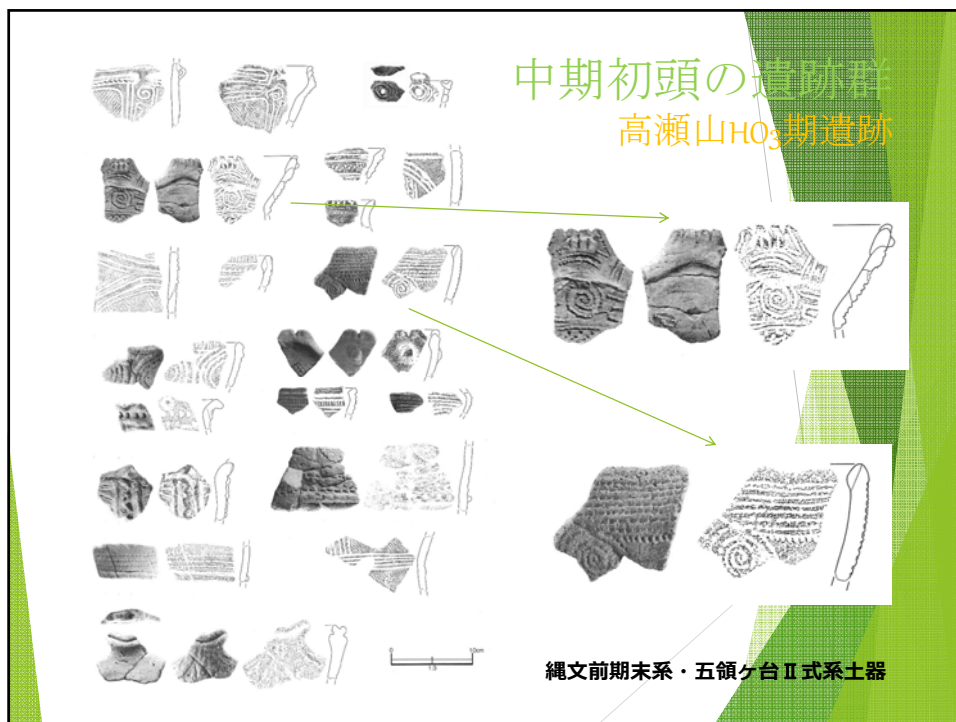
五領ヶ台IIa式

弥三郎第3遺跡

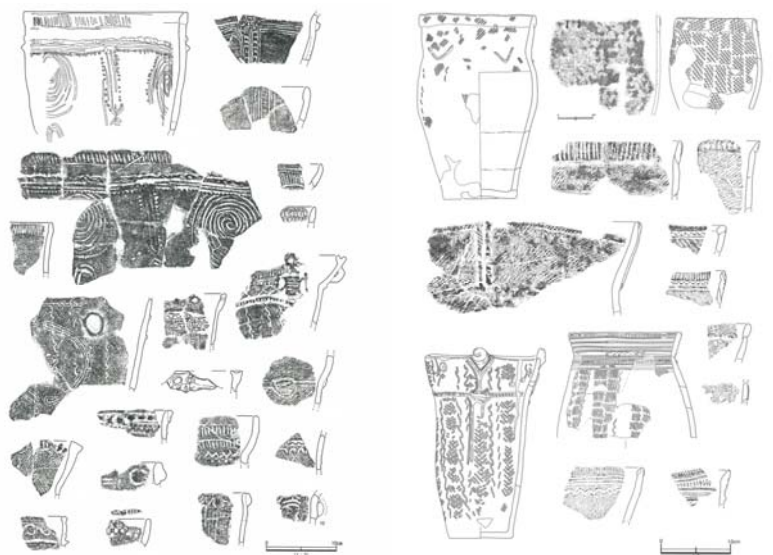


嘉倉貝塚



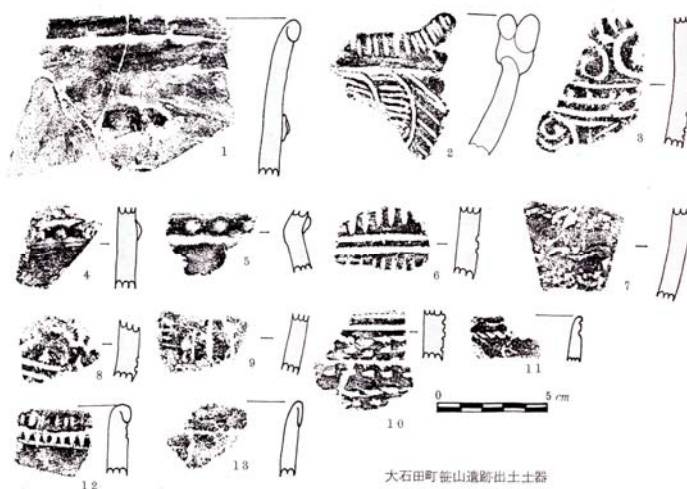


### 中期初頭の遺跡群 板橋2遺跡



五領ケ台Ⅱ式・大木7a式系土器

### 中期初頭の遺跡群 笹山遺跡



大石町笹山遺跡出土土器

五領ケ台Ⅰ式系土器

### 中期初頭の遺跡群 落合遺跡 (1)



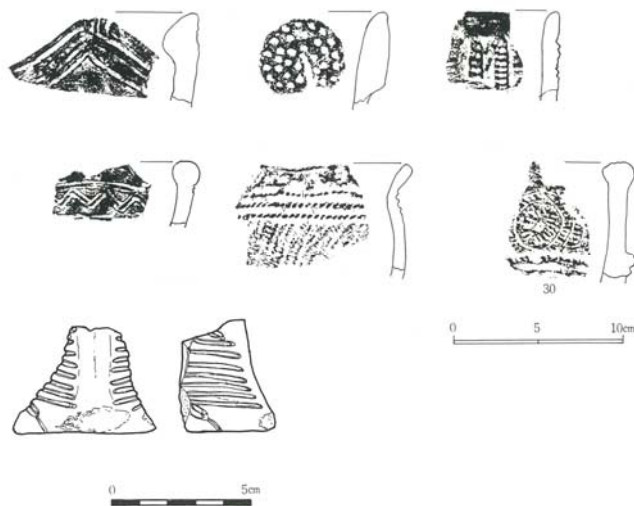
五領ヶ台式系土器 (竹之下式)

### 中期初頭の遺跡群 西ノ前遺跡



五領ヶ台式系土器・下小野式系土器・新崎式系土器・竹ノ下式・大木7b式土器

### 中期初頭の遺跡群 本町遺跡



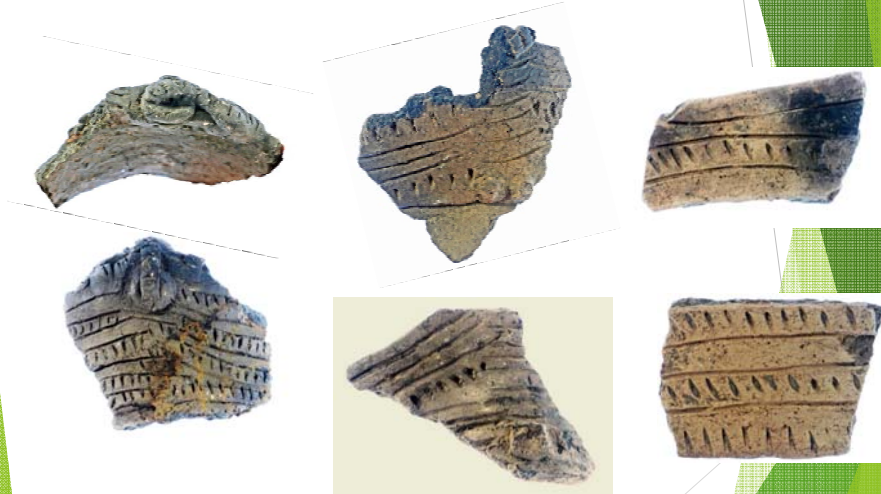
縄文前期末・五領ヶ台 I 式系土器・糠塚式系土器

### 水木田遺跡の始まりの頃（1）



大木 6 新式～五領ヶ台 I 式系土器

### 水木田遺跡の始まりの頃（2）



糠塚系土器

### 水木田遺跡の始まりの頃（3）



五領ヶ台Ⅰ式系土器

水木田遺跡の始まりの頃（4）



五領ヶ台Ⅱ式系土器

水木田遺跡の始まりの頃（5）



下小野・五領ヶ台式系土器

水木田遺跡の始まりの頃 (6)



北陸新崎式系土器

水木田遺跡の始まりの頃 (7)



円筒上層b式系土器

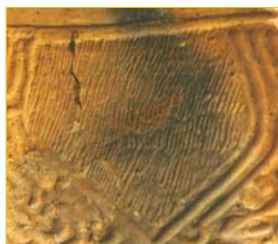
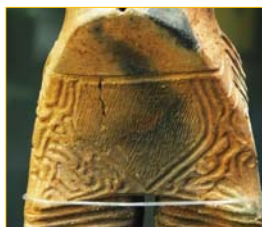
## 西ノ前型土偶の秘密 土偶は歩く



## 国宝土偶「縄文の女神」の見どころ

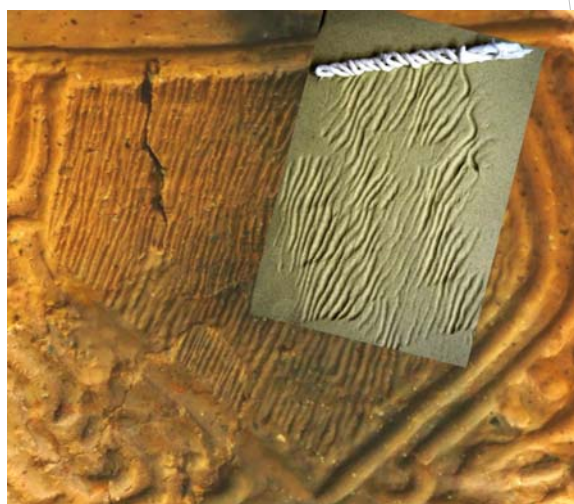
- ▶ むね
- ▶ 乳房は大きな「W」字様にデフォルメされ、この様式化された表現こそが「西ノ前型土偶」に特有の形態と位置づけられます。この「W」字様の乳房は腋部の本体と一体ではなく、貼り付けられて後に整形されたことがその側面観から明瞭です。原形は№17や№22などの表現に窺われ、それらが先行する形態と考えられます。また、「W」字の両先端はお腹の張り出しにつながる稜線と連結し、左右の腹側を平面として描きだすことに成功しました。こうした表現はさりげなく巧みごとといえるかはありません。
- ▶ おなか・こし
- ▶ 「おなか」から「こし」の部分には渦巻意匠の文様やベース形の五角形区画文が描かれています。区画の内部には土偶としては稀有な一段反撚りの縄文（R+O段の本多条）が充填されており、この時期の土偶とすれば異彩です。縄文は無節の反撚りであることから条の揺らぎや乱れが特徴的に出現し、縄としては不安定な螺旋状から生成されたことが分かります。なお、こうした反撚りの縄文は中期初頭（五領ヶ台式）の土器群中に多く見られることから、土偶の時期が従来言われていた大木8a式よりも幾分遡る可能性が考えられます。
- ▶ パンツ文様の中心にあるベース形の区画文は中部高地に開花した棚畑遺跡の「縄文のビーナス」に見られる所謂「対称弧刻文」や「デルタ文」等と同系の文様で、如何に「女神」と「ビーナス」に相関があるかが分かる具体的な事例です。なお、棚畑遺跡の土偶の時期は五領ヶ台式最終段階のものでその典型例とされています（今福<sup>1998</sup>「中部高地の縄文中期前半における土偶の基礎的把握」『土偶研究の地平』）。女神よりはやや遡る時期の所産とされる所以ですが、女神自体もそこまで遡る可能性は否定できません。

## ビーナスと女神のパンツ表現の類似性



「対称弧刻文」

## 女神のパンツと文様（原体）

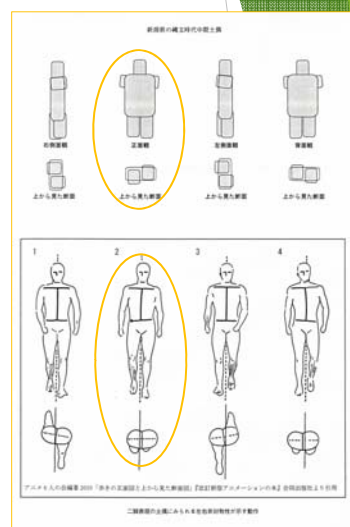


1段反撚り：Rr（0段3本多条）

## 国宝土偶の立姿

- ▶ おしり・土偶モデル
- ▶ 後ろから見たお尻は小さくて丸いキュートな表情をみせています。神々のビーナスが**豊満な張りや丸み**、包容力に溢れた体形であるのに較べれば、女神のそれは初々しさや、**ボーイッシュな乙女さ**さえも思わせる若々しさが特徴です。この違いはいったい何を意味するのでしょうか。一つ考えられることは**土偶のモデル**が地域によって違うからではないかということです。とすれば、ビーナスはより成熟した女性像、女神は少女から大人へと向かうより若い女性像を志向した**縄文人それぞれのイメージ**に関わっていたと考えることができるかもしれません。
- ▶ あし
- ▶ 安定感ある角柱状の長脚は**右脚が垂直でやや短く**、**左脚はやや外側に開いて後ろに流れる感じで幾分長めに**表現されています。そのため、この両脚は左右の位置が平行には重ならず、**右がやや前**、**左がやや後ろ**に引いた姿に作られていることが注目されます。また、右脚より左脚が幾分太くなっていて、意識的とは断定できないながら、これは「歩く」という動作に関わっていると推測されます。右脚は踏み出して止まり、左脚は後ろに引いて次には必ずと前に繰り出す、そんな一瞬の流れを表現していると捉えることも可能です。

## 縄文の女神の非対称性



## 立像土偶の所作

- ▶ うごき・所作
- ▶ 右脚が少し前にあって重心がかけられ、左脚を幾らか後ろに引いて爪先立ったような姿勢から、「これから歩き出す」、既に「歩いている」など、動きのある瞬間的な所作を表している可能性が推測されますが、このような二脚表現のみられる土偶に対しては、既にそれらの「造形が左右非対称でほとんど例外なく、右脚に比して、左脚が長く大きい」
- ▶ また上からみた断面では、右脚が前方に左脚が後方に位置している」（宮尾亨・寺崎裕助<sup>2012</sup>「新潟県の縄文時代中期土偶」『新潟県立歴史博物館研究紀要 第13号』と考察されており、「縄文の女神」もその例外ではないことが確認できます。すなわち、「縄文の女神」は実は「歩く土偶」を表現した造形だった可能性が強いのです。
- ▶ 加えて、こうした土偶は「周回させることで、アニメーション効果をもって歩いているように見える」（前掲宮尾亨・寺崎裕助<sup>2012</sup>）と論及されており、その効果は土偶の用途や用いられ方、あるいはその取扱いや作法なども大いに関わりがあると考えられます。仮に歩く土偶だったとすればそれは何を意味しているのか、簡単に結論は出せませんが、もしかしたら「変幻自在に動き回ることができ、万物の再生や、豊穡な恵みさえも思いのまま操ることができる精霊的な存在」として縄文人にとっては絶大な力をもった「依り代」だったと考えてよいのかもしれない。

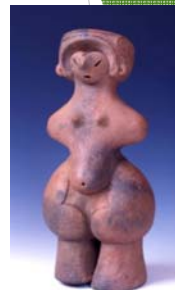
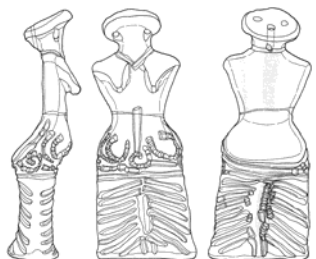
## 両脚の秘密



## 立像土偶の共通性



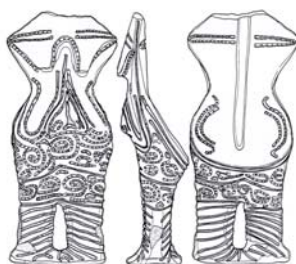
中ノ内A遺跡



棚畑遺跡



水木田遺跡



## 鼓形(臼形)頭部を持つ石棒

つつみ  
鼓形石棒



「鼓形石棒は、これまで県内では  
遺物として報告されていません。  
近年、秋田県横手市の福ノ内遺  
跡から、大木弓式期の遺物をと  
もなした資料が出土し、首飾では  
なく石棒の頭部であることが判明  
したため、今回、同時代の資料と  
して、県内でこれまでに出土した  
ものすべてを特に取り上げ展示し  
ました。」

白の上遺跡



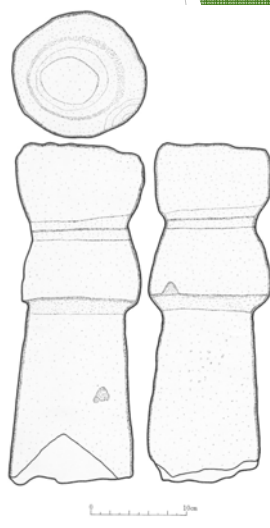
新阿山遺跡



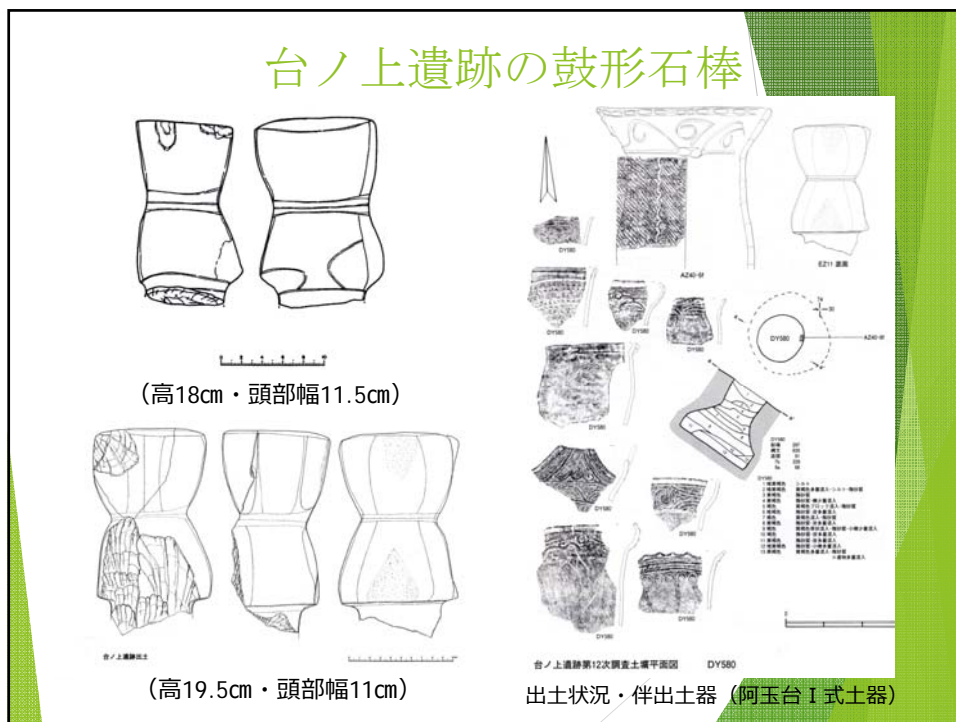
谷沢遺跡



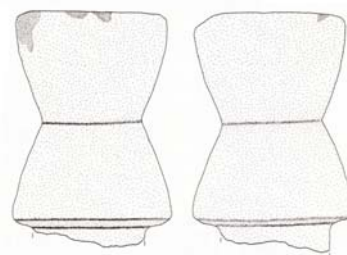
福ノ内遺跡



中ノ内A遺跡 (高35cm・頭部幅13cm)



## 長岡山遺跡の鼓形石棒



0 10 cm  
221 ~ 224・226 (1 : 3)

長岡山遺跡 出土遺物

## 谷沢遺跡の鼓形石棒



「岩偶」とされた  
報告文



(高18cm・頭部幅13cm)

### 堀ノ内遺跡の鼓形石棒



S103-27-S104-17



S103-27



断面 S104-17・S103-27・S103-29



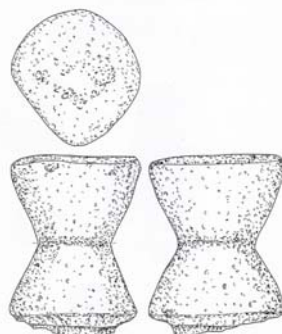
S103-29



断面 S104-17・S103-27・S103-29

写真図版 52 鼓形石棒

(径10.2cm・長27cm)



0 5=1/4 10cm

S103-27 (Q064) 断面(1)に相当



(高20cm・頭部幅15cm)

### 堀ノ内遺跡の鼓形石棒の時期



S103-18 (SK41・182)

S103-21 (SK41・090)

S103-20 (SK41・132)

S103-19 (SK41・181)

S103-4 (914)

S103-8 (935)

S103-5 (973)

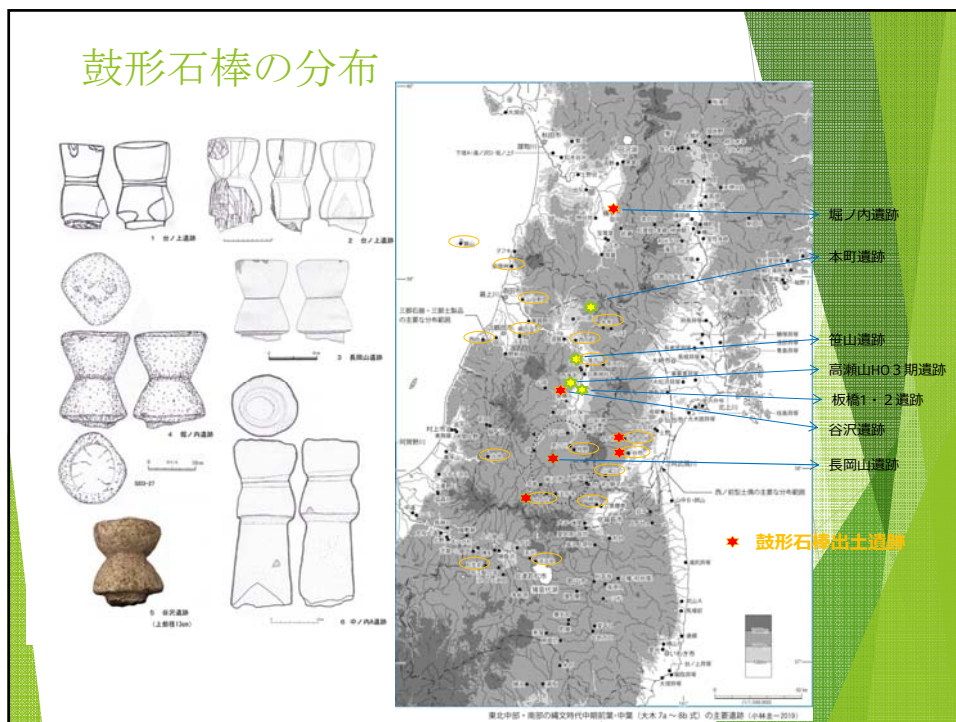
S103-9 (899)

S103(1) 竪穴建物跡出土遺物

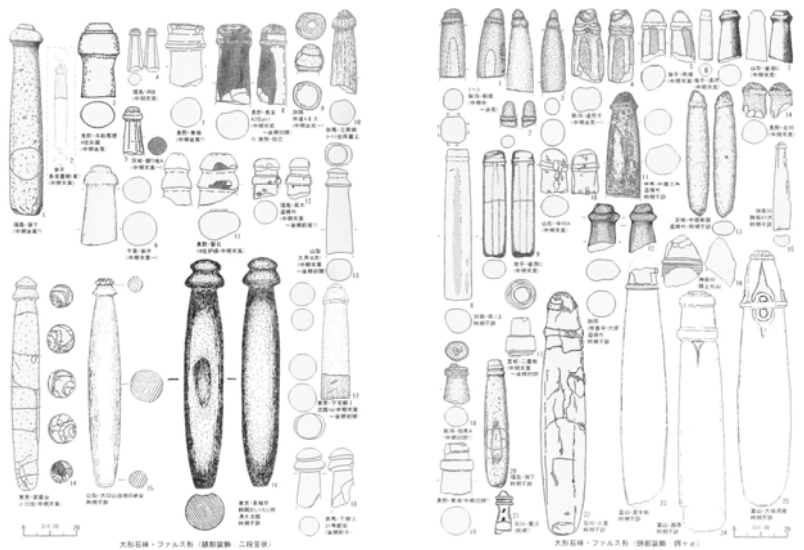
03(2) 竪穴建物跡出土遺物

0 5=1/3 10cm

五領ヶ台Ⅱ式並行土器・大木7a式土器



### 日本各地の石棒の類例

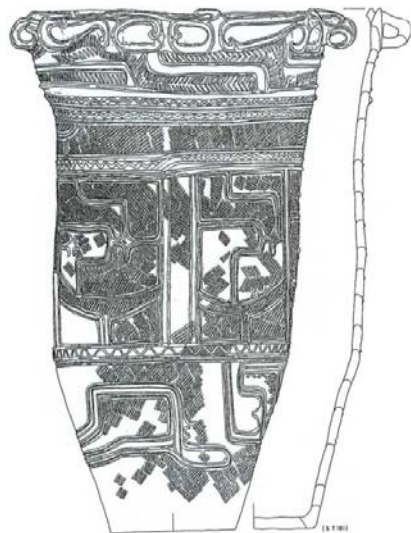


### 超大型深鉢形土器の謎 台ノ上遺跡の人体文土器



人物の登場：物語性

## 二つの巨大な土器



水木田遺跡

(高さ89cm)



落合遺跡

(高さ74cm)

## 超大型深鉢形土器の謎 村山市落合遺跡 (1)



高74cm : 元山形県一番の深鉢形土器

## 超大型深鉢形土器の謎 村山市落合遺跡（2）



人物性の物語土器

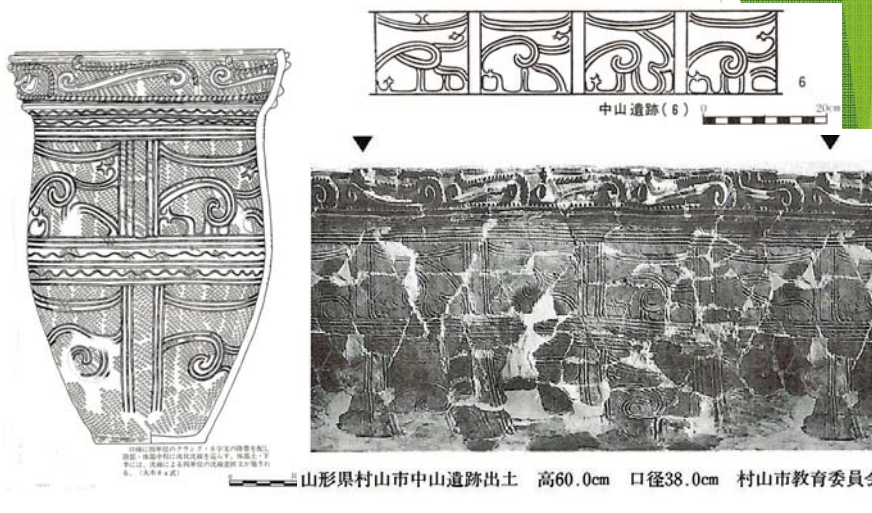
## 超大型深鉢形土器の謎 水木田遺跡（山形県1番の大型土器）



山形県最上町水木田遺跡出土 高88.5cm 口径50.0cm 山形県教育委員会

物語性の様式化

# 超大型深鉢形土器の謎 村山市中山遺跡



# 超大型深鉢形土器の謎 西海淵遺跡の大型深鉢



## 国宝土偶西ノ前遺跡出土土偶「縄文の女神」の見どころ(2)

### あたま・みみ

頭は本来平らな円盤で、首から上に突き出たNo.3・4・9のような栓形でした。女神はそこから90°前面が立ち上がることで顔のスペースを獲得し、栓の縁だった所が大きく広がって半円の被りもの状となったものです。頭の穿孔は後頭部に貫通する1孔が基本で、両耳の位置に各1孔が穿たれるNo.5・6のような3孔も基本型です。

### かお

顔は目・鼻・口を描けるスペースがあるにもかかわらず省略されています。この「のっぺらぼう」の理由は不明ながら、あえて描写しないという選択や意思を汲み取る見方からすれば「顔なし」にこそ意味があるとする説が有力です。さらには「精霊」や「妖精」のような「ヒトを超越する存在としての土偶」という論理に発展し、顔がないのが当たり前という考え方に行きつきます。

### むね

乳房は大きな「W」字様にデフォルメされ、この様式化された表現こそが「西ノ前型土偶」に特有の形態と位置づけられます。この「W」字様の乳房は胸板の本体と一体ではなく、貼り付けられて後に整形されたことがその側面観から明瞭です。原形はNo.17やNo.22などの表現に窺われ、それらが先行する形態と考えられます。また、「W」字の両先端はお腹の張り出しにつながる稜線と連結し、左右の腹側を曲面として描きだすことに成功しました。こうした表現はさりげなく巧みごとというほかはありません。

### おなか・こし

「おなか」から「こし」の部分には渦巻意匠の文様やベース形の五角形区画文が描かれています。区画の内部には土偶としては稀有な一段反撚りの縄文（Rr0段3本多条）が充填されており、この時期の土偶とすれば異彩です。縄文は無節の反撚りであることから条の揺らぎや乱れが特徴的に出現し、縄としては不安定な螺旋形状から生成されたことが分かります。なお、こうした反撚りの縄文は中期初頭（五領ヶ台式）の土器群中に多く見られることから、土偶の時期が従来言われていた大木8a式よりも幾分遡る可能性が考えられます。

パンツ文様の中心にあるベース形の区画文は中部高地に開花した棚畑遺跡の「縄文のビーナス」に見られる所謂「対称弧刻文」や「デルタ文」等と同系の文様で、如何に「女神」と「ビーナス」に相関があるかが分かる具体的な事例です。なお、棚畑遺跡の土偶の時期は五領ヶ台式最終段階のものでその典型例とされています（今福1998「中部高地の縄文中期前半における土偶の基礎的把握」『土偶

研究の地平2』)。女神よりはやや遡る時期の所産とされる所以です。

## おしい・土偶モデル

後ろから見たお尻は小さくて丸いキュートな表情をみせています。棚畑遺跡のビーナスが豊満な張りや丸み、包容力に溢れた体形であるのに較べれば、女神のそれは初々しさや、ポイッシュな乙女さえも思わせる若々しさが特徴です。この違いはいったい何を意味するのでしょうか。一つ考えられることは土偶のモデルが地域によって違うからではないかということです。とすれば、ビーナスはより成熟した女性像、女神は少女から大人へと向かうより若い女性像を志向した縄文人それぞれのイメージに関わっていたと考えられるかもしれません。

## あし

安定感ある角柱状の長脚は右脚が垂直でやや短く、左脚はやや外側に開いて後ろに流れる感じで幾分長めに表現されています。そのため、この両脚は左右の位置が平行には重ならず、右がやや前、左がやや後ろに引いた姿に作られていることが注目されます。また、右脚より左脚が幾分太くなっていて、意識的とは断定できないながら、これは「歩く」という動作に関わっていると推測されます。右脚は踏み出して止まり、左脚は後ろに引いて次には自ずと前に繰り出す、そんな一瞬の流れを表現していると捉えることも可能です。

## うごき・所作

右脚が少し前であって重心がかけられ、左脚を幾らか後ろに引いて爪先立ったような姿勢から、「これから歩き出す」、既に「歩いている」など、動きのある瞬間的な所作を表している可能性が推測されますが、このような二脚表現のみられる土偶に対しては、既にそれらの「造形が左右非対称でほとんど例外なく、右脚に比して、左脚が長く大きい。また上からみた断面では、右脚が前方に左脚が後方に位置している」（宮尾亨・寺崎裕助 2012「新潟県の縄文時代中期土偶」『新潟県立歴史博物館研究紀要第13号』）と考察されており、「縄文の女神」もその例外ではないことが確認できます。すなわち、「縄文の女神」は実は「歩く土偶」を表現した造形だった可能性が強いのです。加えて、こうした土偶は「周回させることで、アニメーション効果をもって歩いているようにみえる」（前掲 宮尾亨・寺崎裕助 2012）と論及されており、その効果は土偶の用途や用いられ方、あるいはその取扱いや作法などとも大いに関係があると考えられます。仮に歩く土偶だったとすればそれは何を意味しているのか、簡単に結論は出せませんが、もしかしたら「変幻自在に動き回ることができ、万物の再生や、豊穡な恵みさえも思いのまま操ることができる精霊的な存在」として縄文人にとっては絶大な力をもった「依り代」だったと考えてよいのかもしれない。